

夫権現の伝説

山本郡琴丘町天瀬川 小玉 長右エ門 (60才)

南祖の坊に追われた八郎太郎は、十和田湖を捨てて、安住の地をさがし求めた。米代川を下って来たところに大きな潟があった。これこそかっこうの住みかと定めた。

潟の畔に老夫婦が住んでいた。二人の中にそれはそれはきれいな娘が一人居たが、これを見そめた八郎太郎は姿をかえて美男子となり、夜な夜な通ううち、ある晩姥にその正体を見破られてしまった。姥は可愛い娘をこんな恐ろしい見苦しい大蛇にまかせることは出来ない。何とかして遠ざけたいと苦心したが、とうとう一計を案じた。

それは八郎太郎が、朝の一番ドリの鳴き声を合図に自分の住み家に帰る習慣があることに気づき鳴き声をまねて一刻でも早く帰そうとした。

一方、八郎太郎が一番ドリがだんだん早くなることを不思議に思っていたが、それが姥のしわざとわかり、激怒した八郎太郎はその姥を思い切りふんづけたところ、潟を飛び越えてはるか芦崎の地に落ちた。それから後姥と翁と一しょに暮せなくなった。